

聖徒の日 説教 「天と地が結ばれて」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年11月6日

マタイによる福音書 13:18-23

聖徒の日を迎えました。皆さまと共に、今年もこうして永眠者記念礼拝を守ることが許され、主に心より感謝申し上げます。特に、ご遺族の皆様を広くお迎えしての礼拝は、コロナ下にあっては3年ぶりのことでありました。それは、この3年間、私たちは集まることを避けなければならない状況にあったからです。ただ、その状況は今も変わりはありません。人が集まり、接触することには未だに一定のリスクが伴うからです。しかし、それにも関わらず、こうして多くのご遺族が礼拝に集うてくださっている、それは、召された方々への思いの深さゆえのことでもあります。それだけではなく、私たちがこうして集められているのは、一人一人が共にある神様の御心の内に置かれているからです。それは、様々な不安に満ち溢れているこの世にあって、神様が神様の平安に与らせようとしてのことです。そして、神様がそれを願うのは、この平安こそが御許にある方々が日々味わい知るものでもあるからです。ですから、主の御許に置かれている者も、地にある私たちも、神様からの恵みを分かち合うという点で共々に一つとされている、このことを先ず強く心に留め、ご一緒にこの日の御言葉に聞いて参りたいと思います。

そこで、その私たちに与えられている御言葉がマタイによる福音書 13:18 以下の御言葉です。冒頭の小見出しでは「『種の蒔く人』のたとえの説明」とありますが、その譬えをもって語られていることは、神の国の奥義、つまりは、その秘密についてです。従って、私たちは今、イエス様の口を通し、この神の国の秘密、奥義を直接聞いているわけですが、ただ、私たちにとっては秘密であっても、イエス様の御許にあっては公然と語られているものでもあるのです。ですから、そう考えれば、神の国の奥義とは召された方々にとっては秘められたことではなく、普通のこと、日常的な事柄であるということです。しかし、私たちにとってはどうでしょうか。特に、愛する

方々との別れを経験し、未だ主の慰めと癒やしを求める人々にとっては、このイエス様のお言葉は秘め事であるがゆえにまた、安穩と聞くのが難しい御言葉であるように思うのです。なぜなら、22節でイエス様が「世の思い煩い」について触れておりますように、身を引き裂かんばかりの悲しみや苦しみに囚われているということはつまり、思い煩うなど仰るイエス様のお言葉とせめぎ合うことにもなるからです。

しかし、この「世の思い煩い」は、愛する者との別れを経験した方々ばかりが味わうものではありません。世に生きるということは、日々、様々な思い煩いの中に置かれることでもあるからです。私たちの多くが、この思い煩いから解き放たれ、日々、喜び、祈り、感謝のうちに過ごしたいと、そう心から願うのはそのためです。ですから、多くの方々が「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」というこのテサロニケの信徒への手紙一 5:16-18 の御言葉を愛唱聖句とするのは、この世がそれだけ思い煩いに満ちあふれているからです。まただから、御言葉も喜び、祈り、感謝せよ、とそう励ますわけですが、それは、こうして御言葉に聞いている者すべてが、世の終わりを目指して共に歩みを進める者でもあるからです。ですから、喜びと祈りと感謝をもって日々過ごすことを御言葉が求めるのは、この世の終わりを、私たちが思い煩いの中に迎えないためでもあります。この御言葉に励まされ、この世を歩み通されたのが愛する兄弟姉妹でもありました。それゆえ、それらの方々の地上での歩みは私たちにとっての生きる手本であると言えるのでしよう。

従って、ご遺族の皆様が今年もこうしてこの場へと集められているのは、そのように召された方々を手本とする毎日を過ごされ、それを神様が御心に止められたからです。しかし、その一方で、私たちは依然として思い煩いの日々を過ごしている、ただ

し、それは、不思議なことではありません。私たちだけではなく、召された方々も世にある時には、私たちと同じように思い煩いの日々を過ごしておられたからです。けれども、今は違います。御許にあるからこそ、思い煩いから解き放たれ、平安のうちに過ごすことが許されているのです。永遠の眠りについていてということはどういうことだからです。そして、イエス様によって同じようにこの永遠の安息へと招かれているのがこの場にある私たちでもあるのです。

しかし、安息へと招かれながらも、思い煩うことの多い私たちは、永遠の安息を覚えるがゆえにまた、それが理由となって新たに思い煩うことにもなるのです。それは、天を思い、地を思い、私たちの思いは二つに引き裂かれることになるからです。そして、この心が分かれるということがまさに思い煩っている状態そのものを指し示しているわけですが、それに対してまったく正反対の状態が先ほどお伝えした喜び、祈り、感謝するということです。この日のイエス様のお言葉で言うならば、それが良い土地に蒔かれた種ということでもあります。そこで、多くの人はこの引き裂かれた状況から逃れるためにも、喜び、祈り、感謝する日々を歩む必要があると、そんなふうを考えたりもするわけです。しかし、先ほども申しましたように、皆さんが手本とする人々の地上での姿は、日々、思い煩いの中に置かれるものでもありました。

ご遺族の皆様にとって、愛する方々は日常を共にした方々です。ご遺族だけでなく、私たち藤沢教会員にとりましても、愛する方々は、主の日から主の日へと導かれる、この日常を共にした方々です。まただから、御言葉もそういう私たちの関係性を神の家族と呼ぶのです。ただ、その私たちの日々の暮らしは、思い煩いを抱えながらの毎日でもありました。ですから、特に近いところで過ごされた方にとりましては、そうした日々の暮らしはうまく言葉にできないものでもなるのでしょうか。まただから、しっかりせねば、強くならねば、と自らを叱咤激励したりもするのでしょうか。し

かし、しっかりせねばと、強くあらねばと、こうして御言葉に聞きつつ私たちがそう思うってしまうのはどうしてなのでしょう。私たちは今、天にある人々と同じようにイエス様のみ声を聞くことが許されているのです。私たちが安息へと導こうとしているこのイエス様の声、その姿をこうして見て、聞いているのがイエス様と共に神様を礼拝する私たちであるのです。ところが、それとはまったく正反対のところに置かれてしまうのはどうしてなのか。それは、私たちがそのいずれを選び取らなければならないと思いつているからです。つまり、天を取るのか、それともこの世の様々な事情を取るべきなのかと、その心が天と地に引き裂かれている状態に置かれている、そして、それが地に生きるということでもあるのでしょうか。ですから、そのような状態の中から、喜び、祈り、感謝の日々がもたらされることはありません。それは、御言葉が私たちに語る、喜びも、祈りも、そして、感謝も、二つに引き裂かれままで与えられることはないからです。与えられるのは、私たちが神様の御心のうちに憩うからです。

ですから、そこでまた私たちは思うのです。イエス様がこの譬えをもって仰ることは、喜び、祈り、感謝の日々を過ごせずにいる私たちがこの良いものを奪い取られ、また、根がなく、御言葉に躓き、枯れてしまい、あるいは、世の思い煩いや誘惑によって御言葉から離れ、実を結ぶことすら許されない、私たちとはそういうものなのではないか、ということ、私たちはどうしても考えてしまいます。しかし、そう思うところ、私たちに誤解があるように思います。

イエス様がこの譬えを持って私たちに伝えようとしていることは、私たちが良い土地になることでもなく、また、そうならなければならないということでもありません。召された方々を私たちが手本とするということは、こうしてイエス様の声を聞き、その姿を見つめる私たちはすでに良い土地に生きているということなのです。この種を蒔く人の譬えは、私たちにそのことを気づかせてくれるものなのです。このこ

とはつまり、私たちと同じように地上に生き、主の御許にあって永遠の安息に置かれている方々は、良い土地に蒔かれた種であり、この良い土地でその生涯を全うされた方々であったということです。そして、それは、こうしてイエス様の御言葉に聞いている私たちも同じなのです。私たちはこの良い土地に蒔かれた種であり、これから蒔かれる種ではないからです。ですから、私たちが手本とすべきものは、愛する方々と同じように同じことをしなければならないということではありません。同じように既に良い土地に自分は生きている、私たちのこの命は既に良い土地に蒔かれたものである、手本にするということとはつまり、ご両親より命を受け継いだご遺族の皆様にとっても、こうしてイエス様の御言葉に聞いている私たち藤沢教会員にとっても、同じ一つの命に生き、同じように永遠の安息へとすでに招かれているという、愛する方々と同じように神様の祝福の中に自らの姿を見出し、そして、それを続けていくことなのです。

ところが、その私たちがどうしても思い煩い、心が引き裂かれ、あたふたとしてしまう。それは、繰り返しになりますが、それは、私たちがどうしても天と地の両方を一度に見つめてしまうからです。そのため、私たちはこの思い煩いを自分の力で何とかしようとするのですが、ただ、目を皿のようにしてその両方を見つめ、何とかしようとする私たちのことを、イエス様はそれを理由に全否定するわけではありません。イエス様が御言葉を聞いて悟る者は御国において100倍、60倍、30倍の実を結ぶと仰るように、神様からの十分な恵みを約束されているのがこうして御言葉に聞いている私たちだからです。しかし、そこには確かな違いがあるのです。そして、その違いは受け取る恵みの価値の違いではありません。100倍も30倍も神様の恵みという点においては同じことだからです。ただ、100倍、30倍と言われると、地に生きる私たちはそれを価値の違いとどうしても判断してしまうわけです。しかし、良い土地から得られるものは、それがリンゴであ

ったり、お芋であったり、お米であったりと、実に多種多様なものでもあるのです。むしろ、命を根源的に支えるという点では、小ささの中にこそ、その価値は際立つものでもあり、その収穫量によってその価値が損なわれるものではないのです。

ですから、良い土地に生きる私たちにはこのように収穫が保証されているわけですから、この良い土地を荒らすような真似だけは慎まなければなりません。あのアダムとエバも、樂園にいる時には額に汗して地を耕す毎日を過ごしていたように、神様の祝福の中に自らの姿を見出すということは、そのように自らの役割を一人一人が担うということだからです。ただし、この自らの役割を担うということは、十字架の上のイエス様がその時その傍らで十字架につく犯罪人に向かって「あなたは今日私と一緒に樂園にいる」と仰ったように、自らの十字架を担うということでもあるのです。従って、喜び、祈り、感謝する日々は、神様が与えられた役割、自らの十字架を担うところでしか生じることはありません。そして、この十字架を担うということは、イエス様が十字架につかれる前に弟子たちに向かって、繰り返し、繰り返し、「互いに愛し合いなさい」と仰ったように、私たち一人一人が互いに愛し合いながら過ごすことでもあるのです。それは、良い土地に蒔かれた種が実を結ぶためには、互いに愛し合うという、この養分こそが欠かせないものだからです。

ただ、この互いに愛し合うことの大切さは、それが大切なことであることは私たちにも十分すぎるほど分かってはいることです。しかし、愛そうとして愛せない、愛したくても愛せない、それが思い煩うことの多い私たちでもあるのです。そして、私たちが天と地との両方を見つめ、身が引き裂かれる思いをするのはそのためでもありませんが、まただから、その困難さゆえに私たちは愛を手放そうとしてしまうのです。けれども、その時にこそ、私たちは知らされるのです。それは、天にあって地にあって、こうして御言葉に聞いている私たちと、神様の独り子であられるイエス様が共にいてくださっている、互いに愛し合うこ

とができず思い煩いの毎日を過ごす私たちがこうして御言葉の前に立つ時、そのことを私たちは知ることになるのです。そして、それが今、この場所を実現していることでもあるのです。

では、私たちにとって今この場所はいかなる者に見えるのか。この共にあるイエス様ゆえにまた、もしかしたら、私たちの目には、愛が覚め、愛を見失ったこの地上の姿は不毛な、収穫などまったく見込めないと、そう見えることがあるのかもしれない。そして、それが十字架の持っている一側面でもあるのですが、ですから、そこは到底樂園などとは思えないところでもあるのでしょうか。けれども、その場所にじっとして、そこから一ミリたりとも決して動こうとされないのが私たちのイエス様でもあるのです。ですから、このイエス様を知るには、今ここにあるイエス様という神様の愛に、自らの十字架を担いつつ、私たちの目を、耳を、その五感のすべてを向けて、その方の声、その姿を感じ取る必要があるのです。なぜなら、その時、このイエス様が私たちと共にあり、そのイエス様の御言葉に聞くことで、天と地がイエス様であって結ばれていることを私たちは必ず知ることになるからです。ですから、それは、あっちなのか、こっちなのか、ということではありません。今、ここに、ということであり、喜び、祈り、感謝の日々は、今ここにあるイエス様を見つめる中から始まっていくものなのです。

従って、そういう意味で、天と地との両方を見つめる中で生じるその思い煩いは、私たちをイエス様の前に立たしめるための原動力だとも言えるのでしょうか。ですから、そう考えるなら、思い煩いを無下に否定する必要はありません。大切なことは、私たちが思い煩うか煩わないかということではなく、その時、私たちがどこに立たされているのかということだからです。そして、それがイエス様というお方の御前であり、そして、そのことに気づかされるのが、私たちが嘆き、悲しみ、時に怒り哮るその時でもあるからです。そして、このことは、私たちにとってまったく未経験なこ

とではありません。愛する者を天へとお送りしたその時、悲しみの中で私たちは、イエス・キリスト、この方が共にいますことをはっきりと経験させられたからです。

ですから、それについては早く気がつくに越したことはありませんが、早い遅いに拘る必要もありません。ある人にとって、そのことへの気づきが与えられるのは死の間際であるかも知れませんが、大事なことは、イエス様が今、ここに共にあると言われていることが私たちが気づく気づかない以前に、こうして御言葉に聞いている私たちには、今この時実現しているということなのです。だから、私たちはいたずらに恐れたり、悲しんだりする必要はありません。必ずいづれ気がつかされるものであり、そのためにイエス様の御許にあつて祈り続けておられるのが私たちの愛する方々でもあるのです。ですから、私たちがどんなに思い煩うことがあったとしても心配には及びません。子どものように朝を迎え、その日1日をまるで何事もなかったように始めることができるのが私たちであるからです。まただから、イエス様も子どものように、幼子のようにと仰るのです。こうして今ここにイエス様が共にいますことを知ったものは、だから、子どものように喜び、祈り、感謝する日々を、無理に言葉にせずとも、そういう日々を歩み、やがて御国へと導かれることになるのです。

それゆえ、この日、私たちに知らされていることは、天と地とが分たれていることではありません。イエス様ゆえに天と地とが一つとされ、私たちはすでに御国に生きているということであり、この恵みを恵みとしてもう一度しっかりと受け止め、愛する人々との再会を喜び、祈り、感謝しつつ待ち望むなら、私たちは、今ここで、互いに愛をもって、それも愛せる者とだけでなく、愛せない者とも、共にあるイエス様を見つめながら日々過ごすことが許されているのです。祈りましょう。